石川

第65回 青少年読書感想文全国コンクール

県代表作品 ⑧

十四歳の私は

かほく市立宇ノ気中2年　數馬（かずま）　すずかさん

書店で新しい本との出会いを求めていたところ、『14歳の君へ』という本を見つけた。呼び止められたような気がして思わず手に取った。十四歳の私はこの本を読んで、今考えるべき多くのことを学んだ。勉強のこと、友達のこと、自分の未来のこと―。考えることの重要性を教えてくれた中でも、特に印象に残っていることが二つある。

一つ目は『自分らしくを求めることが、自分を自分らしくなくしている』ということだ。初めその言葉を目にしたとき、私はわずかながら反感を覚えた。なぜならいわゆる「自分探しの旅」で、自分らしさなんて簡単に得られると思っていたからだ。逆に本当の自分から遠ざかっていくなんてあり得ない、そう感じた。だが私が思っていたことは、ずれていたようだ。自分らしさや個性というものは、自らなろうとするものではなく、自ずと表れるものだと。自然と成り立っていく自分…そんなもの私にあるだろうかと少し考えてみたところ、なんとなくイメージが持てた気がする。小さい頃から習っているバレエ。同じ曲、同じ振付の踊りでも、人によって踊り方が異なる。『無意識に必然と』表れる自分の踊り方というのは、確かに指摘されても修正しにくいものだ。それも自分らしさの一つなのだろうと気づいた。ありのままの自分というのは、探して見つかるものではない。だから私は言葉の通りありのままでいること、それを互いに認め合うことを大切にしていこうと思うに至った。

二つ目は、『法律は善悪ではない』ということだ。「法律」それは、悪いことをした人や罪を犯した人を罰するためのものだと私は想像する。でも実はそうではなく、ある時代で人間が決めたもので、社会の中での善悪している。常に自分の中に善悪があるのに、なぜ人は過ちを犯すのかと、疑問を抱いたが、心の中に善悪があるからこそ、人は過ちを犯してしまうのかもしれないと思うに至った。ある人にとって善である事が、ある人にとっては悪だったりする。自分の中で正義であると思ってした行いが、ある人にとっては不義だ。例えば、人の役に立つなら何をしてもいいのかということだ。小学五年のとき、私が一番仲良くしていた友人が他の友人と喧嘩（けんか）をした。「その子とは話さないで。」と仲良しの友人に言われていたので、話しかけられても気づかないふりをしていた。仲良しの友人のためと思っていたので、別に悪いことをしつと思ってとった行動が、悪い方向へ働いてしまったこと。今となっては、私にとってよい教訓になっている。筆者がそう促すように、私もとった行動の先がどうなるのか、客観的かつ俯瞰的に考えた上でその行動が本当に正しいことなのか、自分で判断していこうと思う。そして、失敗を重ねながらも、誰かに頼ることなく、自分の心の中の善悪を信じていけるようにしたいと強く思う。

私は、この本が、自分で常々ぼんやりと考えているようなことの道しるべを示してくれたように思う。十四歳の私にとって、将来何が起こるかは誰にも分からないけれど、自分はありのままでいること、自分の心の中の善悪が信じられるようになることが大切だと思えた。そんな自分の在り方を考えながら、夢に向かって突き進んでいきたいと思う。『14歳の君へ』に出会えたことで、思考することの大切さを知ることができた。私と同じ14歳の人たちにも、夢を追う中や人生の歩みの中で、越えられそうにない壁にぶつかったときこそ、一度立ち止まって、考えてみてほしいと思う。私たちは今何をすべきかを。そして、自分の中で見出した答えを行動に移してみてほしい。今見えているものが全てではなく、必ずどこかに何かあると信じて、想像力を働かせてほしい。そうすることで、一つの事でも多方面から諦めずに考え続けていこう。誰もがきっと、そう強く思えるようになるはずだ。（「14歳の君へ どう考えどう生きるか」池田晶子・著、毎日新聞社）

中学校の部　自由読書

こよみは下に掲載

5ミリ以上　5ミリ未満　のち　一時・時々

数字（上）最高気温　（下）最低気温
丸囲みは降水確率
白ヌキは50%以上
↘は正午の風向き
矢印なしは無風